

向田邦子作品的語彙 -以隨筆為調查文本-

池田晶子

東吳大學日本語文學科／博士課程

摘 要

向田邦子的隨筆在亞洲各國受到了高度評價，但未見隨筆的詞彙相關研究。因此，筆者製作了向田邦子隨筆的語料庫，調查隨筆中特別常用的詞彙是哪些，並且分析哪些詞彙讓讀者感到“懷舊”或“想到昭和時代”等的印象。分析的結果，發現了以下幾個特徵。

- A) 呈現昭和時代感的詞彙（“戰爭”，“事件”，“名人”，“時髦的東西”等）雖然不多，但卻給人留下深刻的印象。
- B) 因時代變化而演化而來的詞彙，或之前時代的衣服或房屋內部的描繪、或跟現在不同的漢字表記也能深刻地反映出時代的變遷。
- C) 跟家庭有關的詞彙，例如“父”和“母”。表現發話時的面部表情和聲色的“臉”和“聲音”之類的詞。五本隨筆集都有曾出現的與“死亡”有關的詞彙。上述詞語雖然出現頻率相當高，但並非用來表示時代的變遷。

關鍵詞：隨筆 向田邦子 昭和 懷舊 時代變遷

向田邦子作品の語彙 —随筆を対象として—

池田晶子

東呉大学日本語文学科／博士課程

要 旨

向田邦子の随筆は、日本のみならずアジア各国でも非常に高い評価を得ているが、向田の随筆集を対象にその語彙について調査したものはない。そこで、本稿では五冊の随筆集のコーパスを作成し、「懐かしい」「昭和を感じる」などと評される向田の随筆には、どんな語彙がよく使われているかを調査した。

その結果、次のことがわかった。

- A) 昭和を感じさせる語彙(「戦争」「事件」「著名人」「流行りもの」など)は、語彙数は多くないが、非常に印象的。
- B) 時代の移り変わりによって変化した語彙、服装や家の内部を描写する語彙、表記が今とは異なる語彙は、時代の変化を印象づける。
- C) 「父」「母」など家族に関する語彙と、「顔」「声」など発話時の表情や声色を示す語彙、また随筆五冊を通して、「死」に関する語彙が多いが、時代の変化を表すものではない。

キーワード：随筆 向田邦子 昭和 懐かしさ 時代の変化

**Vocabulary of Kuniko Mukoda's work
-for Essays-**

Akiko Ikeda

Doctoral course student,
Department of Japanese language and Literature, Soochow
University

Abstract

Kuniko Mukoda's essays have been highly evaluated in Asian countries, But there is no survey of the vocabulary Kuniko Mukoda's essays. Therefore, I created a corpus of all essays and investigated what vocabulary is often used in Mukoda's essays, which are said to be "nostalgic" or "feel the Showa era." As a result of analysis, this paper examines some point.

- A) The vocabulary that makes you feel Showa era is not large, but it is very impressive.
- A) The vocabulary that has changed with the times, the vocabulary that describes clothes and the interior of the house, and the vocabulary that has a different notation impresses the changes of the times.
- B) Through the vocabulary related to family, the vocabulary showing facial expressions and voices, and vocabularies related to "death", but these words do not represent the changes of the times.

Keywords: Essay, Kuniko Mukoda, Showa, nostalgia, Time changes

向田邦子作品の語彙

—随筆を対象として—

池田 晶子

東呉大学日本語文学科／博士課程

1. はじめに

向田邦子の作品を読むと、そこに登場する言葉や情景に懐かしさを感じる¹、或いは、「昭和」という時代を感じるとも言われる。²

昭和四年に生まれ昭和五十六年に亡くなった向田邦子は、確かに「昭和」という時代を生きた文筆家である。向田邦子が生きたのは「昭和」という時代だけであり、昭和の事件や風物を、その確かな描写によって今に伝えている。

向田邦子の作品の語彙には特筆すべきものがある。それは、『向田邦子鑑賞事典』の中に、わざわざ「向田邦子語彙ワールド」という章が設けられていることからもうかがえる。

向田の随筆は非常に高い評価を得ているが、向田の随筆集の語彙について調査したものは管見の限りない。そこで、「懐かしい」とか、「昭和」という時代を感じると言われるのは、どのような語彙や表現によりもたらされる印象なのか、随筆集のコーパスを作成し、テキストマイニングのツールも併せて使い、調査することにする。

¹ 向田邦子(1981)『父の詫び状』、文藝春秋の「裏表紙」には「だれの胸の中にもある父のいる懐かしい家庭の息遣いをユーモアを交じえて見事に描き出し(た)(中略)最高傑作」とある。

² 松田良一(2000)「昭和の精神の語り部」『向田邦子鑑賞事典』、東京：翰林書房、p.34に、「向田邦子は(中略)昭和のイメージをいかに再現するかに気を使った」とある。

2. 向田随筆に関する先行研究と本稿の対象、及び方法

向田邦子の随筆に焦点を当てて考察を加えた研究はそれほど多くはないが、随筆集『父の詫び状』の中の「ごはん」と随筆集『眠る杯』の中の「字のない葉書」については、日本の中学校の教科書に載せられているために、教材論としての観点からこれを論じたものは多々ある。また、向田邦子の随筆の文章構成について考察したものには、随筆集『父の詫び状』の構成についての佐久間(1995:156)³があり、「チーコとグランテ」をはじめとする随筆の構成についての落合(2004: 195-219)⁴がある。

向田の随筆は「昭和」という時代を映す鏡のような一面があるのは確かで、随筆についての論考には、特に「昭和」を彷彿とさせる内容と語彙について概観したものが多い。松田(2000:34-37)⁵は、向田邦子を「昭和の精神の語り部」と呼び、小説と随筆を対象として、その記述内容と語彙に注目し、昭和という時代のディテールとして向田が表現したとして五つの項目を挙げている。①父親の家庭での特別待遇、②家庭の行事の記録、③近所や来客に対するもてなしの記述、④東京ことばの再現、⑤戦前戦後を通じて、食卓によく出ていた食べ物、である。松田のこの考察は、小説と随筆をまとめて観察したもので、①②③は表現されている事柄なのに対して、④⑤は主に語彙を対象にしている。

川本(2008:86-87)⁶は、向田邦子の作品の中で特に「昭和」

³ 佐久間まゆみ(1995)「第十二章 向田邦子」『随筆・紀行の表現』、東京：冬至書房 156頁

⁴ 落合由治(2004)「文章の基本的構成について-基本的構成から次の段階の構成へ-」『台湾日本語文学期』、台北：台湾日本語文学期、p. 195-219

⁵ 松田良一(2000)「昭和の精神の語り部」『向田邦子鑑賞事典』、東京：翰林書房、p. 34-37

⁶ 川本三郎『向田邦子と昭和の東京』、東京：新潮社、p. 86-87

を感じる部分について、作家ならではの視点から考察をしている。考察の対象は主に語彙ではなく内容で、例えば、「昭和」という時代の父親像を文章の巧さと結びつけて論じ、具体例を挙げて解説を加えている。

近藤(2016:32-23)⁷は、随筆「ごはん」における父親の命令形、また「艦載機」や「B29」などの語彙について教材論の立場からの考察があり、短絡な読解を避ける面で参考になる。このように語彙に目を向けた考察は少なく、まだ基礎的な調査が行われていないのが現状である。

本稿においては、随筆を対象に、どのような語彙が使われているのかを明らかにする。向田の随筆集の中にはテーマごとにオムニバス形式で構成されているものもあるが、ここではそれらを対象とせず、執筆順に出版された全ての随筆集『父の詫び状』『眠る盃』『無名仮名人名簿』『霊長類ヒト科動物図鑑』『夜中の薔薇』を対象とし、よく使われている語彙を随筆集ごとに集計し、その語彙について簡潔な説明をつけることとする。

まず、いったんテキストマイニングにより抽出された資料から、すべての語彙の数を集計し、どのような語彙が多用されていたのかを調べる。次に、一つ一つの作品に当たり、時代を表しうる特徴的な語彙を取り出し、五つの随筆集にどの程度使われているか、どんな用法で使われているのかを五冊の随筆集全体を横断して調べることにする。

随筆中に登場するすべての語彙を取り上げることはしない。形式名詞「こと」や一人称代名詞「私」、また「うち」や「日」のように、非常に多く使われている語彙で、時代を経

⁷ 近藤明「向田邦子『ごはん』教材研究二題：父の「命令形」/「艦載機」とB29の心象等」『教育実践研究』42、金沢：金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、p.32(1)-p.23(10)

でも使われ方に大差がないものは調査の対象とはしない。⁸

3. テキストマイニングによる語彙抽出

まず、向田邦子の随筆にはどんな語彙が多く使われているのかを調べるために、テキストマイニングツールを利用して出現頻度が高い語彙を抽出してみた。使用したツールは、株式会社ユーザーローカルが無料で提供している「AI テキストマイニング」⁹というもので、登録をすれば一度に 200000 字までのテキストを分析できる。向田の随筆が一冊約 120000 字程度であることから、一冊ずつに分けて分析し、五冊それぞれの使用語彙の特徴を明らかにした。

このテキストマイニングツールを使うと、テキスト内に使用されている名詞、動詞、形容詞、感動詞がレンマ(基本形、原型)の形で抽出できる。今回の調査では、テキスト中の形態素について細かく分析することが目的ではなく、使われている語彙、主に時代性が感じられる名詞について調べたかったので、四つの品詞のみ抽出されるというのは却って煩雑にならず好都合であった。

しかし、このツールでは抽出された語彙がテキストのどの位置にあるかを表示することはできない。それで、このツールとは別に、五冊全てに OCR 処理を施したコーパスを自作し、それを参照してそれぞれの語の位置を確かめた。その結果、正しく形態素解析されたデータをレジスターとしているわけではないにもかかわらずゴミの数はそれほど多くなっていないとわかった。

⁸ 下に挙げる表においては、随筆集『父の詫び状』『眠る盃』『無名仮名人名簿』『霊長類ヒト科動物図鑑』『夜中の薔薇』を、それぞれ『詫び状』『眠る盃』『人名簿』『霊長類』『薔薇』と略して表示し、本稿中においてもそのように省略することとする。

⁹ 「AI テキストマイニング」<https://textmining.userlocal.jp/>
(検索日 2020 年 8 月 31 日)

表 1 五つの随筆集における名詞、動詞、形容詞、感動詞の数

品詞	詫び状	眠る盃	人名簿	霊長類	薔薇	計 ¹⁰
名詞	5967	6020	5600	5339	5563	28489
動詞	1441	1443	1393	1335	1443	7055
形容詞	269	277	241	257	251	1295
感動詞	12	8	14	13	8	55
総数	7689	7748	7248	6944	7265	36894

ただし、日本語の形態は膠着語的な性格があるために、「語」の規定に様々な問題が生じる。例えば、「日本語」は全体でひとつの語とみてもよいが、「日本」と「語」の二語からなる複合語とみることにもできる。このテキストマイニングツールにおいては、人名や事件の名称も最小単位で示される(例:「三善」「英史」、「昭電」「事件」など)¹¹ので、それぞれ二語として集計されている。

『詫び状』『眠る盃』『人名簿』『霊長類』『薔薇』から抽出した名詞、動詞、形容詞、感動詞を表 1 で示した。それぞれの随筆集から抽出された語彙は一冊 7000 語前後である。

3.1 随筆集五冊の語彙出現頻度

次に、『詫び状』『眠る盃』『人名簿』『霊長類』『薔薇』、それぞれの随筆集に多く登場する語彙上位 15 位までを表 2 にまとめた。

この表を見てわかるのは、ある時代を表す特徴ある語彙が一つもないということである。懐かしさを感じるとか、「昭和」

¹⁰ 延べ数である。重なっている語彙は多数ある。

¹¹ 「三善英史」は 1970 年代に多くのヒット曲を出した演歌歌手。

「昭電事件」は終戦後間もない 1948 年（昭和 23 年）におきた贈収賄汚職事件。

という時代の空気を感じるなどによく言われる向田の随筆であるが、単語レベルで観察する限り、そのような単語は多用されていないことがわかる。

表 2 各随筆集の「名詞」、出現頻度 1～15 位

詫び状	眠る盃	人名簿	霊長類	薔薇
① 父 275	① 父 103	① 顔 106	① 声 96	① 顔 70
② 母 204	② 母 70	② 父 76	② 顔 88	② 子供 54
③ 子供 125	③ ライオン ¹² 69	③ 子供 69	③ 父 81	③ 卵 50
④ 顔 108	④ 顔 67	④ 声 66	④ 子供 78	④ 猫 47
⑤ 祖母 103	⑤ 声 64	⑤ わけ 56	⑤ なか 68	⑤ せい 44
⑥ 弟 72	⑥ 猫 60	⑥ 上 55	⑥ 頭 63	好き 44
⑦ 声 71	⑦ 本 49	⑦ ひとつ 52	⑦ わけ 58	⑦ 父 42
⑧ 卵 70	子供 49	⑧ 友人 51	⑧ ひとつ 55	本 42
⑨ 上 69	色 49	母 51	⑨ せい 54	⑨ 母 41
⑩ 鼻 57	⑩ 味 46	⑩ せい 49	⑩ 気持 52	⑩ 声 40
先生 57	⑪ 電話 45	⑪ 机 46	先生 52	⑪ 身 35
⑫ 気持 55	⑫ 犬 44	⑫ 一番 45	⑫ 母 49	先生 35
⑬ せい 48	一番 44	⑬ はなし 38	⑬ 下 48	気持 35
⑭ 頭 45	上 44	おばさん 38	いま 48	⑭ ひとつ 34
⑮ 一人 44	⑬ 気持 41	いま 38	上 48	匂い 34

まずは多用されている語彙から考えてみよう。

3.1.1 「父」「母」

¹² この表においては、この「ライオン」という語彙が特異な印象を受けるが、これは「中野のライオン」という小品に続き、「新宿のライオン」という後日談、計二作品があるためである。この二作品の中で「ライオン」という語は何度も繰り返され文体にリズムを生んでいる。

「父の詫び状」という随筆でとても著名な作家であるために、向田邦子の随筆と言えば、「父」という語彙が多用されていると考えられやすいのではないだろうか。確かにその通りであるが、この表 2 から「母」という語もよく使われているということがわかる。

「父」「母」二語の出現頻度をまとめたものが表 3 である。第一随筆集である『詫び状』では「父」「母」という語彙が非常に多く登場し、第二随筆集『眠る杯』では出現頻度は減るものの、同様に一位と二位の座を保っている。第三随筆集『人名簿』と第四随筆集『霊長類』では「父」「母」の出現頻度はほぼ同数で、第五随筆集『薔薇』ではどちらも四十余りになっている。

表 3 「父」「母」の出現頻度

語彙	詫び状	眠る杯	人名簿	霊長類	薔薇	計
父	275	103	76	81	42	577
母	204	70	51	49	41	415

これは、『詫び状』の全編と『眠る杯』の前半三分の一が幼年時の思い出をテーマとして記されているからである。それに対し、『眠る杯』と『薔薇』の後半に 40 ページほどは「男性鑑賞法」というパート¹³があり、『人名簿』と『霊長類』は、主にこれまでに会った面白い「人」についての随筆である。さらに、「父」「母」という語は、他の代名詞（「彼」「彼女」など）で置き換えることは普通されないことも、これら二つの語彙の総数が多くなってしまうことと関係がある。

¹³ この部分は、執筆当時の今をときめく男性に関するコメントである。中には回想が含まれているものもあり、この部分もまた「随筆」というジャンルの範疇に含まれると判断し、敢えて除外することはしなかった。

3.1.2 「顔」「声」と「頭」

表 2 から観察できる点として「顔」の出現頻度が高いという点がある。表 2 から「顔」という語彙だけを抜き出して表 4 にまとめてみた。数字は表 2 と同様、それぞれの随筆集の中での出現頻度の順位である。

表 4 各随筆集の「顔」出現頻度

語彙	詫び状	眠る盃	人名簿	霊長類	薔薇	計
顔	④ 108	④ 67	① 106	② 88	① 70	439

「顔」のひとつひとつの語について用法を確認した結果、次のことがわかった。

向田が「顔」という語彙を用いるときには、「困った顔で言った」「怒った顔で言った」など、登場人物が発話するときの表情について描写しているものが多いということである。単独で顔の器官や形について描写した表現が特に多いわけではない。登場人物が発話をするときに、どういう表情で話したのかということ、短い連体修飾節(例:「困った顔」、「怒った顔」など)によって表現することが多い。これは、向田の随筆がとても「映像的」だと評されることと無縁ではなく、人がどういう表情で発話したのかということを丁寧に描写しているのである。

「顔」という語彙が多いもうひとつの理由は、「顔」を用いた慣用句が少なくないという点である。『詫び状』の中だけでも、「顔があう」「顔を出す」「顔に出る」「～も顔まけ」などの表現が見られる。

次に、「声」の出現頻度を表 5 にまとめた。この表から、「声」という語彙が最も多く使われているのは『霊長類』だとわかる。

表 5 各随筆集の「声」出現頻度

語彙	詫び状	眠る盃	人名簿	霊長類	薔薇	計
声	⑦ 71	⑤ 64	④ 66	① 96	⑩ 40	337

『霊長類』の中には「合唱団」や「声変わり」などの小品があり、文字通り「声」について書かれた随筆が収められていることも出現頻度と関係している。

また、「弾んだ声」や「純朴な声」などのように、「顔」と同様、発話する人の声を形容した短い連体修飾節や、「どなり声」「金切り声」など、声の特徴を形容した語彙も多い。

向田の随筆に「顔」と「声」という語がとて多いのは、どちらも発話する人々の表情や声の様子などのディテールを詳しく表現しているからだと言えよう。この点については、池田(2020:71-89)¹⁴に詳しい。

「顔」「声」と比較するために、「頭」の出現頻度を表 6 に示した。

表 6 「頭」出現頻度

語彙	詫び状	眠る杯	人名簿	霊長類	薔薇	計
頭	45	35	38	63	22	203

「顔」「声」に対して、「頭」という語彙は、「頭を下げる」のような半ば慣用的表現で多用されていて、文字通り、身体の一部である「頭」についての描写はほとんどない。「顔」と「声」は表情や機嫌や感情を表すのに使えるのに対して、「頭」はそのような使い方ができないためかと考えられる。

3.1.3 「子供」「上」「せい」「気持」「わけ」「ひとつ」

表 2 では、随筆集別の出現語彙を上位から 15 ほど示したが、次の表 7 では、五つの随筆集すべてをまとめて、多く出

¹⁴ 池田晶子(2020)「向田邦子の文体の特徴—随筆を対象として—」『大韓日語日文学研究』87、釜山：大韓日語日文学会、p.71-89

現している語彙を左の座標軸に一位から二十位まで示し、それらの語彙が各随筆で何度出現しているかも示した。

先に既に触れた「父」「顔」「母」に続き、「子供」「上」「せい」「気持」「わけ」「ひとつ」などの出現順位が高い。この表を一見しても、時代の空気を感じさせる特別な語彙が多く使われているとは言えない。時代を表す特徴的な語彙は多用されていないということがわかる。

表 7 随筆集に含まれた全ての語彙の出現頻度

語彙	詫び状	眠る盃	人名簿	霊長類	薔薇	計
① 父	275	103	76	81	42	577
② 顔	108	67	106	88	70	439
③ 母	203	70	51	49	41	415
④ 子供	125	49	69	78	54	375
⑤ 声	71	64	66	96	40	337
⑥ 上	69	44	55	48	32	248
⑦ せい	48	28	49	54	44	223
⑧ 気持	55	41	34	52	34	216
⑨ わけ	33	34	56	58	24	205
⑩ 頭	45	35	38	63	22	205
ひとつ	39	23	52	55	34	203
⑫ 猫	22	60	29	41	47	199
⑬ 祖母	103	36	14	15	23	191
⑭ 一番	36	44	45	34	21	180
⑮ 好き	30	36	31	24	44	165
⑯ 色	28	49	22	30	31	160
⑰ 卵	70	5	5	22	50	152
⑱ 電話	15	45	29	24	31	144
先生	57	27	22	52	35	144

②⑩ テレビ	19	40	36	21	27	143
--------	----	----	----	----	----	-----

まず、「子供」から観てみよう。『霊長類』の中に比較的多く登場するこの語彙の使われ方を調べると、「子供」という語を含む語彙のうち、半分弱は「子供のころ」「子供の頃」「子供の時分」で、特に「子供の時分」という言い方が目立って多い。この「時分」という語は、今の若い世代があまり使わない表現である。このようにひとつひとつの語彙の用法を調べると、その語自体は今も当たり前に使われる語であっても、用法が一昔前のものだということが確認できた。

第六位の「上」は、複合動詞、名詞、名詞の一部分など、多くの品詞を規律なく網羅してしまっているのも、ここでは考慮の対象としないこととする。

第七位の「せい」は、「～のせい、～」「～だったせい、～」という文型で多用されている。根拠となる理由を曖昧に述べる言い方が多用されているのは、随筆というジャンルとも無関係ではあるまい。

第八位の「気持」は、その表記の仕方が現在常用される「気持ち」と異なるが、現代の用法と変わらないようである。

第九位の「わけ」は、大部分が「～わけがない」というモダリティの用法で使われていた。

第十位の「頭」については先に述べた。同じく第十位の「ひとつ」は、今はもうあまり使われることのないさまざまな用法で使われていた。例えば、「猿股ひとつの父が立っていた」

「交響曲ひとつ、キッチンと聞いたことがない」「通りひとつ向うで、デモ隊の一群が(中略)折詰をひろげている。」(すべて『人名簿』)、「場所ひとつ教わるのも大騒動なのである。」「映画のひとつもさそってやったらどうですか。」「ほかの横綱、大関よりひとつ見おとりのする体」(すべて『霊長類』)などの「ひとつ」の使い方は、年配の世代に限られていて、若い人々はまず使わない。「昭和」を彷彿とさせる語彙であると断

定はできないが、今の若い世代にとっては、意味はわかるが使用語彙ではない表現であろう。

随筆中多用されている語彙を調べてわかったことは、家族に関する語彙が多いこと、発話時の表情や声色を描写した語彙が目立つこと、その語自体は今も当たり前に使われる語であっても、用法が一昔前のものだということもあり得るということである。

4. その他の語彙

次に、表7のランキングには含まれていないものの、多用されている語彙や語群として目立っているもの、及び特徴的な語彙について考えてみる。

4.1 「死」

脚本家として既に名を成していた向田が「随筆」を書き始めたのは、乳癌になりもう自分は長くは生きられないと感じたからだだったという。「あまり長く生きられないのではないかと考えた向田が、「のんきな遺言状を書いて置こうかな」と、手術の後遺症で使えなくなった利き手の右手ではなく左手で書き始めたのが、「父の詫び状」をはじめとする随筆である。¹⁵五冊の随筆集にほぼ平均して、「死」という語彙が多用されている。「死」を含む語彙の出現頻度を表8にまとめた。

表8 「死」の出現頻度

語彙	詫び状	眠る杯	人名簿	霊長類	薔薇	計
死 ¹⁶	35	28	29	29	24	145

¹⁵ 向田邦子(2007)「あとがき」『父の詫び状』、東京：文藝春秋(第5刷)、p. 282-285

¹⁶ 「戦死」など、「死」の文字通りの含意があるものは統計の数に入っている。

『父の詫び状』では、父親の死に関する記述が多く、『眠る盃』では、隣の犬の死や、東京都の中野で飼われていたというライオンの死、その他の動物の死、知人の死、幼友達の死など、対象は少し広がりを見せる。また、『眠る盃』には、著名人の死因について調べたという記述から始まる「勝負服」も含まれている。『人名簿』では、祖父の死や、ひとつ前に執筆された随筆集と同じく著名人の死因について触れられている。「○○(人名)は腸チフスで死んだ」というように、死因と共に死にざまについても書かれているものが多い。『霊長類』でも、人の死に方についての記述が多く、「親の死に目」という慣用的語彙が何度も登場している。マムシなどの動物の死やモンローの死などについても触れてある。『薔薇』では、父のことを回想する記述で「死んだ父は～」という書き出しを多用しているため、「死」という語彙が多くなっている。「～は死ぬまでわからない」のようにほぼ慣用句のように使われているものや、比喻として使われているものも多数ある。あらためて、向田随筆の中には、こんなにも多くの「死」に関する記述があったのだと驚かされる。

平原(2000:22-25)¹⁷は、『父の詫び状』は「生と死の記録装置」であると書いた。向田本人が「あとがき」で述べているように、「遺言」として記されたという『詫び状』における「死」に関する叙述は他の四冊より多い。そして作品自体も優れている。今回、この調査を通して、その後の『眠る盃』『無名仮人名簿』『霊長類ヒト科動物図鑑』『夜中の薔薇』においても、引き続き様々な「死」の在りようが語られていたと確認できた。随筆集の中では「死」という要素が絶えず意識され

¹⁷ 平原日出夫(2000)『『父の詫び状』—生と死の記録装置—』向田邦子鑑賞事典』、東京：翰林書房、p. 22-25

続けていたと言えよう。

4.2 時代を経て変化している語彙

向田の随筆の中には、聞いたことはあるが、或いは意味はわかるが、比較的若い世代がもはや使っていない語彙が多数登場する。明治、大正時代の文豪の使う語彙の中に聞いたことがない語彙が散見されるのとは異なり、向田随筆の語彙は、辞書を引かずとも意味がわかるのである。これらの語彙は、ひとつ前の時代を思わせ、懐かしさを感じさせる一因となっているやもしれない。そのような語彙について考えてみよう。

4.2.1 「ご不浄」「手洗い」「トイレ」

「ご不浄」は昭和の第二次大戦前によく使われていた語彙である。「便所」を丁寧に言う言葉で、多くは女性が使っていたという。今でも年配の女性を使うのを聞くことがある。対して、「トイレ」は戦後に普及した語彙である。向田の随筆においては、「ご不浄」「手洗い」「トイレ」という、三種類の語彙が登場する。果たして、向田は、これら三種類の語彙をどのように使い分けていたのだろうか。

表 9 「ご不浄」「手洗い」「トイレ」の出現頻度

語彙	詫び状	眠る杯	人名簿	霊長類	薔薇	計
ご不浄	19	0	11	14	2	46
手洗い	3	0	1	0	1	5
トイレ	1	1	0	0	1	3

随筆中の使われ方をひとつひとつ確認すると、基本的に、幼少時代を回想するときは、「ご不浄」が使われている。例えば、「父の詫び状」の中では、基本的に「ご不浄」が使われている。しかし、同じ作品の中で、「父」と「トイレ」が関連し

て使われている場面二回ではどちらも「手洗い」が使われており、明らかに使い分けが行われているようである。

「ご不浄」という語彙は、『蜻蛉日記』の中にその例を見ることができる古い語であるが、昭和の時代に入ってからよく使われたという。この「ご不浄」には、「女性の生理」や「大便/小便」という派生的語義もある。¹⁸それらの含意を連想することを意図した場面では「ご不浄」が、読者にそれらの含意を連想させることを望まない場面では「手洗い」が使われているようである。随筆における使用頻度が低い語彙で、少なくとも「父の詫び状」においてはそのような使い分けが行われていると言える。

男性が使う場合、「ご不浄」で表されないというわけではない。『詫び状』の「学生アイス」では、列車の向かいの座席に座っていた若い男性が「ご不浄を我慢していた」という表現があるからである。

(向かいの席の男性が差し出したアイスを)礼をいって受け取ったが、ひどく切羽つまった顔で手が震えていた。ははあ、ご不浄を我慢していたんだなと思った。(段落変え)当時はまだ交通事情が悪く、列車の手洗いまで乗客が入っていたからである。¹⁹

このように、「ご不浄」という語のある次の行では列車の「手洗い」という語がある。筆者の想像の部分では「ご不浄」を使っているが、当時の列車の中の様子について客観的に述べる箇所は「手洗い」という語を使っている。もし、この部分を「ははあ、手洗いを我慢していたんだなあ」に換えると、

¹⁸ 「不浄」の項、松村明『大辞林』、東京：三省堂、p. 2253

¹⁹ ()と下線部分は本稿筆者による。以下同。

とたんに「ご不浄」という語が備える具体性や映像性が失われ、無機質なシーンにすり替わるかのようである。同時に、妙齡の女性がやんちゃな想像を働かせているのだという印象もなくなってしまう。

「ご不浄」という言葉のもつ重層性や具体性、女性が主に使っていた語彙であること、駅のホームや街に「アイス売り」がいた時代のエピソードを、語彙を使い分けることにより詳細にまた豊かに描写しているということであろう。

それでは、「トイレ」という語についてはどうであろうか。向田作品の中では「トイレ」という語彙が六回登場している。一つは『詫び状』で、デパートの食品売り場では「臨休」という言葉が「トイレ」を表す暗号だという部分がある。『眠る盃』に登場する「トイレ」は「猫トイレ」のみ、『霊長類』の中もわずか一箇所のみで、ある著名人の男性が「トイレの中でボーナスを数え」ていると随筆筆者が架空の妄想をしている場面で使われている。この「トイレ」は、ホテルやデパートの中にある洋式のトイレを指している。

少数の用例しかないが、そこから見る限り、向田は「ご不浄」「手洗い」「トイレ」という語彙を明らかに区別して使っている。女性が使うもの、女性が想像する語彙としては「ご不浄」、その含意をそれほど連想させたくない場合には「手洗い」、ホテルやデパートの洋式の個室空間や無機質な空間は「トイレ」を使っている。漢字や外来語のカタカナ表記から連想できる含意やイメージを重視して、文脈の「場」にふさわしい単語を選んでいると言えよう。

この他にも、「人寄せ」と「パーティー」、「お勝手」と「台所」、「割烹着」と「エプロン」、「寝巻(き)」と「パジャマ」、「足袋」と「靴下」、「手拭い」と「タオル」、少し特殊ではあるが、「悠木千帆」と「樹木希林」などの組み合わせがあった。これらの組み合わせのうち、はじめに挙げたほうの語彙はど

れも、今となつてはあまり使われず「懐かしさ」を感じさせる語彙であるかもしれない。「昭和」という時代は、戦前から戦後へと生活様式の面で大きな変化を遂げたのだということが改めて意識される語彙の変化である。

4.3 「事件」

「事件」という語も、五つの随筆集のすべてに登場する語彙である。単に「殺人事件」のように普通名詞として使われているものもあれば、「帝銀事件」²⁰、「二・二六事件」²¹のように、歴史上の有名な事件の名称の一部になっているものもある。特に目立つのが『詫び状』の14回で、そのうち4回は歴史上の事件についての記載である。

『詫び状』の「金欄緞子」という作品には、(映画の中に登場する事件としての)「ドレフュス事件」²²、「昭電事件」、「二・二六事件」、「阿部定事件」²³が登場する。『眠る盃』では、「事件」という語彙は五回しか使われていない。歴史上の事件は「帝銀事件」と「二・二六事件」のみである。

「事件」という言葉を使っていなくても事件に言及されている箇所もある。例えば、前段落で触れた「帝銀事件」という語が登場する部分の続きは、「(帝銀事件が起き)、太宰治が死に、東条英機ら戦犯が絞首刑になった。洋裁学校が出来、

²⁰ 1948年(昭和23年)1月26日に東京都豊島区长崎の帝国銀行(現在の三井住友銀行)椎名町支店で発生した毒物殺人事件。

²¹ 1936年(昭和11年)2月26日から2月29日にかけて、皇道派の影響を受けた陸軍青年将校らが1,483名の下士官・兵を率いて起こした日本のクーデター未遂事件。事件の後、岡田内閣は総辞職し、後継の廣田内閣は思想犯保護観察法を成立させた。

²² 1894年当時フランス陸軍参謀本部勤務の大尉ユダヤ人アルフレド・ドレフュスがスパイ容疑で逮捕された冤罪事件。

²³ 仲居であった阿部定が1936年(昭和11年)5月18日に東京市荒川区尾久の待合で、愛人の男性を扼殺し局部を切り取った事件。事件の猟奇性のため逮捕後に号外が出されるなど庶民の興味を惹いた。

スタイルブック²⁴とアロハが街にあふれた。カストリ雑誌²⁵とストリップがはやり、「青い山脈」²⁶と「銀座カンカン娘」²⁷のメロディが流れていた」と続いている。この部分は、事件や時代を表す単語を一気に畳みかけることにより、昭和の戦後の「空気」を読者に感じさせる叙述であると言えよう。

表 10 「事件」の出現頻度

語彙	詫び状	眠る杯	人名簿	霊長類	薔薇	計
事件	14	5	2	2	2	25

『人名簿』『霊長類』『薔薇』には、「事件」という語彙は二回ずつしか登場していない。しかも、『人名簿』にも『霊長類』にも歴史上の事件は描かれていない。『薔薇』に二回登場する「事件」という語彙のうち一つは「二・二六事件」である。「二・二六事件」は五冊の随筆集のうち三冊で言及されているが、そのうち二箇所は澤地久枝の著書の一部なので正味『薔薇』一冊のみでしか使われていない。

『薔薇』に収められている「海苔と卵と朝めし」によると、数え年で八つのころ、宇都宮の社宅に住んでいた随筆筆者は、ニュースを通して母の実家がある麻布で事件が起こったこ

²⁴ 戦後、物資が不足していて衣食住もままならない時代、女性には服飾の型などを図や写真で示した本である「スタイルブック」と洋裁に夢中になっていたという。1946(昭和 21)年春くらいから盛んに発行された。

²⁵ 戦後の日本で、出版自由化を機に多数発行された大衆向け娯楽雑誌のこと。粗悪な用紙に印刷された安価な雑誌で、内容は安直で興味本位なものが多かった。

²⁶ 石坂洋次郎原作の日本映画『青い山脈』の主題歌として 1949 年に発表された曲。藤山一郎の歌として有名。長年にわたって支持され、40 年経った 1989 年に NHK が放映した『昭和の歌・心に残る 200』においても第 1 位となっている。

²⁷ 東宝が配給、新東宝が製作した日本映画の主題歌である。映画は 1949 年 8 月 16 日に公開された。同年 4 月に高峰秀子の主題歌が発売されている。

とを知り、子供心にも切迫したのを感じたという。しかし、後の記述は社宅の間取りや家賃のことで、文章自体のテーマも毎朝食べていた卵と海苔の朝食のことである。事件に関する詳細な記述はない。

「二・二六事件」という語彙は、この随筆の冒頭で使われている。「二・二六事件のころ、私たちは宇都宮に住んでいた。」という書き出しである。「1936年」や「昭和11年」などのように年代で示すよりも、「二・二六事件のころ」と書いたほうが、その時代の不穏な空気がより身に迫って感じられ、どんな時代背景だったかが読者に伝わりやすいとの考えによるものであろうか。

『人名簿』『霊長類』『薔薇』にはどれも、警察官が若い女性に乱暴をしたなどの所謂「不祥事」としての「事件」が描かれている。

このように見てくると、実際に起きた事件についての記述は決して多いとは言えない。しかし、いったんその事件に纏わる語彙が登場すると、非常に効果的にその当時の時代の「空気」が読者に伝わるという仕組みになっている。

「事件」にかかわらず、いつごろかということを表す文段の切り出しの部分では、「～という流行歌がはやっていたころ」のように、西暦あるいは昭和何年かを直接示すのではなく、「〇〇が流行したころ」「〇〇なニュースがあったころ」、というように、具体的な時代や世代のイメージを読者に思い描かせるような書き方が多用されている。これも読者の脳裏に昭和の出来事や思い起こさせたり、懐かしさを感じさせたりできる手段だと言えよう。

4.4 「戦争」と戦争関係の語彙

「戦争」という語彙は、五つの随筆集を通して使われているが、戦争に関する記述は多くない。随筆の中に描かれてい

るのは多く戦後の出来事で、戦中のことは子供の目を通して観た印象を描いたものが多い。あるいは、祖父や祖母の口を通して語られた戦前や戦争自体の思い出も比較的多い。

一度のみ登場する語彙が大多数なので、ここでは二回以上登場する六種類の語彙のみ挙げた。戦争に関する語彙そのものはそれほど多くない。しかし、多くは鮮烈な描写を伴うエピソードなので、読んだあとには非常に印象に残る。

ゲートルを足に巻いている父親の姿、焼夷弾が降り注ぐ中を逃げ惑った思い出、妹の学童疎開、戦時中盛んであった薙刀の教育、家の周りの垣根まで焼けてしまう経験をした東京大空襲など、ここに集められている語彙は「子どもの目」を通して観た、非常に印象的な戦争の記憶である。

表 11 「戦争」とそれに関する語彙

語 彙	詫 び 状	眠 る 杯	人 名 簿	霊 長 類	薔 薇	計
戦 争	12	7	12	8	8	47
(学童)疎開	1	4	0	0	1	6
焼夷弾	1	1	1	1	0	4
戦 前	8	4	4	7	1	24
ゲートル	1	0	0	0	1	2
東京大空襲	2	4	1	0	0	7
薙 刀	2	0	0	2	0	4

4.5 「家」の内外や「調度品」に関する語彙

建物に関する語彙が非常に多いのは、『詫び状』である。

「井戸」という語彙は、使われ方に特徴がある。五冊の随筆集に八回登場するこの「井戸」という語彙のうち、半分は「井戸端」(例えば「井戸端会議など」という形で使われている。必ずしも、当時の家の内外に井戸があってそれを描写してい

るわけではなかった。

「縁側」という語彙は、すべての随筆集に登場しているが、特に「縁側」に関する詳しい記載があるのは、『霊長類』の中の「孫の手」という作品のみである。

「玄関」は『詫び状』の表題作「父の詫び状」の中に圧倒的に多く登場する。この随筆は主に玄関で起こった出来事を回想しているもので、「敷居」や「土間」や「三和土」や「くつぬきの石」や履き物の脱ぎ着の仕方まで詳細な記述がある。当時の生命保険会社支店長の家族の生活が目につかぶ。

向田に随筆の中では、「お勝手」と「台所」の二通りの言い方が使われている。しかし、「お勝手」という語彙は二度しか使われていない。

ひとつは、随筆筆者が高知県にいたとき住んでいた社宅が城の堀のすぐ横にあったことを描写している箇所である。

「由緒ある城のお濠が、お勝手と茶の間の出窓の下に隣り合っているというのは、ひどく贅沢な気分になるものである」とある。社宅の出窓から見える風景に赴きがあったことを描写している部分である。

もうひとつは、明治生まれの祖母の台詞の部分「今晚は油ものだから、お勝手が大変だ」という箇所である。このように、古めかしいが風雅さが感じられるようにしたい場合には「お勝手」が使われている。比較的無機質な印象がする「台所」という語彙はそのような場面では使われていない。

今でも、ほとんどの一戸建ての日本家屋の台所には、玄関とは別に出入り口があって、そこからゴミ出しや暖房用の灯油の搬入などを行っている。この出入り口を「勝手口」と呼ぶ、この言い方はまだ生きている。しかし、「台所」の古い呼び方である「お勝手」は、今では年配の女性が口にするのを時折聞くのみである。これも時代の変化を感じさせ、懐かしさを呼び起こす語彙のひとつと言えよう。

「茶の間」は家の中で、家族が団欒を楽しむ場所であった。今風の言葉で言うと「リビング」だが、「リビング」という語彙は『霊長類』に一箇所登場するのみで、「洋風のリビング」という使われ方がある。洋風のリビングルームを表す場合には、この「リビング」という外来語が使われている。家の中にあって、床を張らないで、地面のままになっている所を「土間」という。昔の家の中では、玄関を入ったところや、台所の一部が土間になっている造りも多かった。

今は「土間」自体を見る機会が少なくなってしまったので、若い世代には懐かしく感じられる語彙かもしれない。

表 12 「家」の中外や「調度品」に関する語彙の出現頻度

語彙	詫び状	眠る杯	人名簿	霊長類	薔薇	計
井戸	4	0	2	1	1	8
縁側	13	5	2	4	2	26
玄関	34	7	14	20	6	81
ご不浄	19	0	11	14	2	46
敷居	6	1	0	1	0	8
手洗い	3	0	1	0	1	5
台所	17	2	8	22	9	58
お勝手	1	0	0	1	0	2
三和土 ²⁸	5	0	1	0	0	6
土間	1	1	1	2	2	7
茶の間	18	10	12	8	5	53
ちゃぶ台	0	0	3	0	1	4
座敷	16	2	1	2	1	22
納戸	3	6	0	3	4	16

²⁸ 本来は建築素材や製法を指す。現在ではコンクリートやタイル、大理石などの玄関の土間も「たたき」と呼ばれる。

『霊長類』の中には、執筆当時のマンションの玄関での出来事も、子供時代を回想した玄関でのエピソードもどちらも多数登場している。「玄関」という語彙は、向田随筆の「家」に関する語彙の中で、もっとも多用されている。回想中のさまざまな事件が起こった「玄関」と、脚本家となった後、さまざまな客人や到来物を迎える「玄関」とを対比させて描写している「父の詫び状」のような作品もある。「玄関」という語彙自体は 81 回と、それほどたくさん使われているわけではない。しかし、向田随筆の中においては、事件や出来事が起こる場所、いろいろなものが入ってきては出ていく場所としてよく使われると同時に、非常に重要な役割を担った語彙であると言えるであろう。

4.6 著名人の名前

向田は脚本家であり、映画雑誌の編集者だった時期もあり、また作家でもあったので、向田自身の職業ゆえに知りえた、または身近で観察できた、または深く洞察できた芸能人の名前が作中に登場している。随筆家として活躍する人は多くとも、このように芸能人たちと身近な距離で付き合い、随筆にその記録を残している随筆家はそれほど多くはないだろう。

或いは、その時代に著名であった人々についての記述や普遍的によく知られている著名人に関する記載も多い。例えば、次のような人の名前が挙げられている。

芸能人 エノケン²⁹、松田優作³⁰、オノヨーコ、武田鉄矢、東海林太郎、

²⁹ 榎本健一は、日本の俳優、歌手、コメディアンでエノケンの愛称で広く全国に知られた。「日本の喜劇王」と呼ばれ、第二次世界大戦期前後の日本で活躍した。

³⁰ 松田優作 山口県下関市生まれの俳優、歌手。強烈なカリスマ性を

森光子、沢田研二、市川染五郎、三波春夫³¹、大江千里、澤地久枝、轟由紀子³²、水谷八重子、浅香光代³³、森繁久彌、根津甚八、ピラニア軍団³⁴、志ん生、黒柳徹子、中村メイコ³⁵、鶴田浩二、牟田悌三、浅丘ルリ子、山崎務、川谷拓三、室田日出男、加藤治子、三善英史、田中絹代、水の江滝子、いしだあゆ

政治家 ニクソン、田中角栄、小泉信三³⁶、毛沢東、乃木大将、中川一政、

作家 夏目漱石、太宰治、松本清張、ヘミングウェイ、三島由紀夫³⁷、阿刀田高、吉行淳之介、吉川英治、開高健、山口瞳、川崎洋、丸谷オーなど。

映画俳優 マーロン・ブランド、チャップリン、ジャン・マレー³⁸、マリ

もち、萩原健一と並んで同時代を代表するスターだった。

³¹ 戦後昭和の歌謡黄金期を代表する歌手の一人。笑顔と美声と和服の歌謡で知られる。

³² 宝塚歌劇団 21 期生で娘役として活躍した。昭和 12 年、日活が映画『宮本武蔵』主演女優をタカラジェンヌから選ぶこととし、轟を宝塚少女歌劇団から退団させた。この引き抜きは世間を驚かせた。

³³ 1937 年（昭和 12）9 歳で浅香新八郎、森静子に弟子入りし、14 歳で浅香光代一座を組み、1955 年（昭和 30）大江美智子、不二洋子らと共に女剣劇全盛時代を創りあげた。

³⁴ 東映所属の大部屋俳優を中心に 1975 年に結成された俳優軍団。強面で、映画・テレビドラマで斬られ役・悪役などを演じた。

³⁵ 日本の女優、歌手、タレント。2 歳の時に天才子役としてデビューして以来、榎本健一や徳川夢声、柳家金語楼、森繁久彌らと共に演じた。NHK にはテレビ放送開始以前のラジオ時代から出演。黒柳徹子と並んで日本のテレビ放送黎明期を語る上で欠かせない存在。

³⁶ 慶應義塾大学教授。1933 年（昭和 8）には慶應義塾長に就任。1945 年（昭和 20）の東京大空襲で焼夷弾の接触により顔面に火傷を負った。1949 年（昭和 24）には東宮御教育常時参与に就任、皇太子明仁親王の教育掛となった。1966 年（昭和 41）5 月死去。

³⁷ 日本の小説家・劇作家。戦後の日本文学界を代表する作家の一人。「楯の会」を結成し、1970 年（昭和 45 年）11 月、クーデターを促す演説をしたのち割腹自殺を遂げ、社会に衝撃を与えた。

³⁸ フランス出身の俳優。1933 年に映画デビュー、大戦後は舞台と映画で活躍した。戦後は『美女と野獣』（1946 年）、『オルフェ』（1950 年）などのコクトー作品に出演した。

リン・モンロー、グレゴリー・ペックなど。

その他、若乃花、カラヤン、ジョン・レノン、芥川比呂志、和田勉、谷内六郎³⁹、篠山紀信、磯村尚徳、植田いつ子、串田孫一、羽仁進、勅使河原蒼風、五十嵐喜芳、マリア・カラス、ジョー・ディマジオ、永六輔、二子山勝治、小林亜星、塚原ト伝、巖本真理、など。

このように一人一人名前を挙げると、確実に昭和の一時代には、非常にもてはやされた人々が多いとわかる。ある人はとても短い時期だけブラウン管を通して観ていた。ある人は明治の時代のみ、ある人たちは今も活躍し続けている。ある時期だけとても人気があった芸能人のことを懐かしく感じる読者もいるだろうし、現代においても依然としてタレントとして活躍している「武田鉄矢」や「黒柳徹子」などの名前もある。若かりし時代の描写を読んで、現代との違いを改めて知り、若いころはこうだったのかと新鮮さを感じる人もあらうかと思う。

「昭和」の時代を強烈に感じさせ、懐かしく感じられる名前がある。しかし、それだけでなく、「昭和」の時代以外の時代を生きた著名人の事も書かれている。

4.7 その他、流行ったもの

昭和の一時代に流行ったものもよく登場する。全部は挙げられないが、わかりやすいものを例として取り上げたい。

例えば、「クンタ」⁴⁰というのは、向田の随筆に中に出てく

³⁹ 日本の画家。ノスタルジックな昭和の風景を描いた画家として知られ、1956年『週刊新潮』の創刊号から表紙絵を終生担当した。

⁴⁰ 向田の随筆に登場する、よく道で擦れ違っていた少年の飼い犬の名前。アメリカの黒人奴隷の問題を描き、社会現象を巻き起こしドラマ「ルーツ」（日本ではテレビ朝日が1977年10月に8日連続で放送、平均視聴率23.4%を記録。）の主人公の名前がクンタ・キンテで、そこから取られたかと随筆中にある。

る、よく道で擦れ違っていた少年の飼い犬の名前である。この犬の名前は、アメリカの黒人奴隷の問題を描き、社会現象を巻き起こしドラマ「ルーツ」⁴¹の主人公の名前が「クンタ・キンテ」から取られたものかと随筆中に書かれている。道でよく出会う少年のことを書くにしても、「クンタ」という名前だと書くだけで、ドラマ「ルーツ」の流行った時代の出来事や、その時代のイメージを読者は脳裏に浮かべることになる。ある出来事とその時代の象徴的な、あるいは代表的な出来事と結びつけて描写する。この手法も、向田随筆の顕著な特徴であると言えるだろう。

昭和の一時代に流行ったもの、あるいはある時代を思い起こさせる場所や風物や物やドラマや食べ物や表現は、他にも次のようなものがあつた。ごく一部であるが下に挙げる。

紅茶キノコ、「モナ・リザ」、「大学目薬」、親不孝通り、「第三の男」、流行歌「啼くな小鳩よ」、「花の宴」、「7人の刑事」、寺内貫太郎、多摩動物公園、分限者、ノイローゼ、持ち重りがする、ズック、ブルマー、ミンク、鏡台、乳母車、ムームー、セルロイド、アルマイト、膳、スカートの襷、切り下げ髪、隣組、綿入れ、アッパッパ、ランドセルをおっぽり出す、靴磨き、到来物、状差し、モンペ、「赤い殺意」、紅白粉、洞爺丸、足袋裸足、売れ残り、オールドミス、青函連絡船、手毬、味醂干し、カルメ焼、甘納豆、お多福豆、ツルチックなど。

前の節での考察と同じく、昭和の時代に流行したものが多し。しかし、ある語彙は昭和の時代の前から、或いは昭和の時代の後も引き続き存在している。

⁴¹ 日本ではテレビ朝日が1977年10月に8日連続で放送、平均視聴率23.4%を記録。

4.8 表記に違和感を感じる語彙

向田の随筆を読んでいると気づくもう一つの点は、今使われている表記と異なる表記が見られる点である。

お八つ⁴²、仕舞う、口許、仕合せ、鱈子、蒔蘿草

これらの語は今の時代でも使われている単語である。しかし、これらの表記には違和感が感じられる。今の時代にこのような表記を使ったり見たりすることはほとんどないからである。

たとえば、「お八つ」という表記の仕方は、今の時代にはもう忘れ去られてしまっているであろう「おやつ」という語の語源について読者に思い出させるかもしれない。「仕合せ」という語からも、もともと「しあわせ」という言葉がどのように成り立ってきたものなのかを読者に考えさせる。

ここではごく僅かな例を挙げたのみであるが、意味はわかるが表記には違和感を感じるこれらの語彙は、ひとつ前の世代を懐かしく思い起こさせる作用があるかと思う。

4.9 家族の風景

ひとつ前の世代には確実にあった懐かしい家族の風景も、向田の随筆を特徴づけているものであり、同時に現代の読者に懐かしさを感じさせる要素であろう。

随筆の中では、食卓における父親の特別待遇や、遠足や運動会の巻ずしを主としたお弁当作り、父親が夜中に結婚式の引出物やご馳走を持ち帰り子供に食べさせる描写などがある。これらの表現は「語彙」を単に調べるだけでは網羅でき

⁴² 「おやつ」の名称は、古い時刻の数え方である「八つ時（午後2時から4時前後）」に由来する。

ない部分であった。

5. まとめ

随筆集五冊『詫び状』『眠る盃』『人名簿』『霊長類』『薔薇』の語彙出現頻度と特徴的な語彙について調べた。「懐かしい」「昭和を感じる」などと言われる向田の随筆であるが、そのような単語は多用されていなかった。

多用されている語彙には「父」「母」「顔」「声」などがあった。また、その語自体は今も使われる語であっても、用法が一昔前のものだということもあった。

五冊の随筆集にほぼ平均して、「死」という語彙が使われていた。今回、この調査を通して、『父の詫び状』だけでなく、その後の四つの随筆集でも「死」が絶えず意識され使われていたことがわかった。しかし、これらの多用されている語彙や随筆集全体に網羅されている語彙は、共に読者に懐かしさを感じる語彙ではなかった。

向田の随筆の中には、時代を経て変化している語彙がうまく使われていた。聞いたことはある、或いは意味はわかるが、若い世代がもはや使っていない語彙が多数登場する。「ご不浄」「手洗い」「トイレ」の使い分けの他、「お勝手」と「台所」の使い分けや、今は使われることが少ない「三和土」などの家の内部を表す語彙、「割烹着」と「エプロン」、「寝巻(き)」と「パジャマ」、「足袋」と「靴下」などの服装に関する語彙が目立った。これらの語彙は、少し前の世代を思わせ、懐かしさを感じさせる一因となっている。「昭和」という時代は、戦前から戦後へと住まいや服装の面で大きな変化を遂げたのだということが改めて認識させられる。

「事件」という語は、五つの随筆集のすべてに登場する。実際に起きた事件についての記述は決して多いとは言えない。しかし、いったんその事件に纏わる語彙が登場すると、

非常に効果的にその当時の時代の「空気」が読者に伝わるといふ仕組みになっている。ある出来事と、その時代を象徴するような出来事と結びつけて描写する手法も、向田随筆の顕著な特徴であった。

「戦争」という語彙は、五つの随筆集を通して使われているが、戦争に関する語彙そのものはそれほど多くない。しかし、多くは鮮烈な描写を伴う挿話が語られているので、読んだあとには非常に印象に残る。

向田は脚本家であり、映画雑誌の編集者だった時期もあり、また作家でもあったので、向田自身の職業ゆえに知りえた、芸能人の名前が作中に登場している。「昭和」の時代を強烈に感じさせ、懐かしく感じられる名前がある。しかし、それだけでなく、「昭和」の時代以外の歴史上の人物も実際にはよく登場している。

随筆の中では、食卓における父親の特別待遇や、遠足や運動会の巻ずしを主としたお弁当作り、父親が夜中に結婚式の引出物やご馳走を持ち帰る描写などがある。これらは随筆の「内容」に属する部分である。「語彙」を単に調べるだけでは網羅できない。ひとつ前の世代には確実にあった家族総出で物事を行う風景も、向田の随筆を特徴づけているものであり、同時に現代の読者に懐かしさを感じさせる要素であろう。

このように、本稿においては、向田邦子の五つの随筆集を対象に、使われている語彙の特性について調べた。その結果、次のことがわかった。

- A) 昭和を感じさせる語彙（「戦争」「事件」「著名人」「流行りもの」など）は、語彙数は多くないが、非常に印象的。
- B) 時代の移り変わりによって変化した語彙、服装や家の内部を描写する語彙、表記が今とは異なる語彙は、時代の変化を印象づける。
- C) 「父」「母」など家族に関する語彙と、「顔」「声」など発

話時の表情や声色を示す語彙、また随筆五冊を通して、「死」に関する語彙が多いが、時代の変化を表すものではない。

本稿で述べたものの他にも、向田邦子の随筆に使われている語彙には幾つかの顕著な特徴がある。たとえば、ある語彙は随筆の最後の部分でいつも使われていたり、挿話の書き出しの部分で世代を象徴する語彙が使われている点などである。今回は紙幅の関係で、明らかにできなかった。機会があればこれらの点についても述べてみたい。

参考文献

- 池田晶子(2020)「向田邦子の文体の特徴―随筆を対象として―」『日語日文学』87、釜山：大韓日語日文学会、p. 71-89
- 落合由治(2004)「文章の基本的構成について―基本的構成から次の段階の構成へ―」『台灣日本語文学期』、台北：台灣日本語文学期、p. 195-219
- 川本三郎『向田邦子と昭和の東京』、東京：新潮社、p. 86-87
- 近藤明「向田邦子「ごはん」教材研究二題：父の「命令形」/「艦載機」とB29の心象等」『教育実践研究』42、金沢：金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、p. 32(1)-p. 23(10)
- 佐久間まゆみ(1995)「第十二章 向田邦子」『随筆・紀行の表現』、東京：冬至書房、P. 156
- 平原日出夫(2000)「『父の詫び状』一生と死の記録装置」『向田邦子鑑賞事典』、東京：翰林書房、p. 22-25
- 松田良一(2000)「昭和の精神の語り部」『向田邦子鑑賞事典』、東京：翰林書房、p. 34-37
- 向田邦子(2007)「あとがき」及び、裏表紙の「商品説明」『父の詫び状』、東京：文藝春秋(第5刷)、p. 282-285
- 松村明(1995)「不浄」の項、『大辞林』、東京：三省堂、p. 2253

使用したテキストマイニングツール

「AI テキストマイニング」

<https://textmining.userlocal.jp/>

(検索日 2020 年 8 月 31 日)

用例出典(執筆順)

向田邦子(2007)『父の詫び状』、東京：文藝春秋(第 5 刷)

向田邦子(2012)『眠る盃』、東京：講談社文庫(第 62 刷)

向田邦子(2001)『無名仮名人名簿』、東京：文藝春秋(第 25 刷)

向田邦子(2001)『霊長類ヒト科動物図鑑』、東京：文藝春秋(第 21 刷)

向田邦子(2017)『新装版 夜中の薔薇』、東京：講談社文庫(第 5 刷)

